

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

試験的RPG

【作者名】

あんにん

【あらすじ】

これは剣と魔法と理不尽と序でに脱力感溢れる
異世界召喚勇者と転生者、そのパーティーの物語です。

小難しい内容じゃないので、肩の力を抜いてカップ麺でも食べながら
ら

読んでください。

* 作者はとうふ様のツクール作品を応援しております

剣と魔法と理不尽と序でに脱力感を感じさせるRPG

試験的RPG

「マナー化するチート転生者たち!!

今そこに終止符を打つ!!

進撃の時代ですよーっ!!」

俺の目の前で椅子に腰掛けた神様らしきおっさんは妙なことを口走りだした

「で、終止符はともかく

どいつ言っ転生をするんだ?」

「ちょっと待ってろ……そえいゆっ!!」

「……………何その掛け声」「ちょっと新世界創ってみた」
「とんでもねえことじゃがった!?

「これからお前をその新世界に転生させる

安心しろ、剣と魔法と理不尽、ついでに脱力感の蔓延る世界だ」

「前二つはともかく理不尽と脱力感!?

「俺が中学生の頃書き溜めてたチート能力を一つか二つ渡すから安心しろって」

「中学生って、神様にも義務教育とかあるんだな」

「俺みたい人間から神様になった奴はそうだな、他は知らん

で、肝心のチート能力だが…

『影葬・影装』（ハイドアンドアナザー）

ザックリ言っちゃうと自分の触れた影を操る能力だ

「何それ、影絵位にしか使えねえじゃねえか」

「悪い、言い方が悪かったな

要は影を槍状に実体化させて的に突き刺したり

自分の分身を創り出したり出来たりする能力だ」

「まあ普通はそういうふうに解釈するよな」

「なら何故疑ったし」

「死ぬ直前に主人公最弱系の小説を読んでな

しかもマンネリ回避とか言ってるから疑わないほうがおかしい」

「そうか、疑り深いお前にはもう一つプレゼントしてやるっ

『従魔・習魔』（クリーチャーズ）

ドラクエで言う魔物使い、魔物を仲間に出る能力と

仲間にした魔物の技を覚えることができる能力だ」

「これも魔物がいないと意味なくね？」

「居るから安心しろ

正確には魔素って呼ばれる物質に取り込まれたものだけだな」

「魔物って何食べるんだ？」

「基本的に魔素を有する存在

さっき創った世界では魔素を結晶にしたものを通貨にしてるから

それを食べさせてやれば良い、他にも魔素の籠ったアイテムとか」

「つまり襲いかかってくる魔物は追い剥ぎみたいなものか」

「そうなるな、後は嗜好品的に元になった動物に

応じて普通の動物が食べる物も食べる」

「じゃあチートも決まったことで、ほかに質問は？」

「転生後の性別、容姿は？」

「そうだな、影だし闇繋がりで

某スクエア連載中災難系エロ漫画のヤミさんで良いだろ」

「あの人は変身能力じゃないか?」「こまけえこたあ気にすんな」

「てか俺男なんだけど?」

「神の前には性別すら関係ない、訳でもないけど

第二の人生なんだから違う性別を試してみろよ

幸いハーレム願望なんて無いだろ?」

「男色趣味も無い、まあ一理あるか」

「じゃ、転生させるぞー」

そうそう、このシステムも『新しい親との接し方が分からないって』
苦情が多かった少し弄ってみたんだ

好きな時代に好きな年齢でその世界に突然現れる事が出来るぜ」

「そーなのか」「ルーミアの方が良かったか?」「ヤミさんで結構で
す」

「と言っかその世界でどんな事が起こるのか分からんからな

原作開始みたいな台図無いのか?」

「そうだな、急な創りだからありがちだけど

『魔界から魔王と愉快な仲間たちが攻めてきて世界各国が大ピンチ

その半年前にそうなる事を予知したある王国が異世界から勇者
を召喚した

異世界から呼び出された勇者は仲間たちと魔王を倒す旅へ旅立
つ

勇者は魔王を倒し元の世界へ帰れるのか…?』

物語のあらすじを付けるとしたらこんな感じだな」

「凄いがちだな、俺がその異世界から来た勇者か?」

「いんや、お前はそこの世界に居た事になってる
勇者と愉快な仲間たちに関わるかはお前が決めれば良い」

「そうか、勇者が召喚される国の名前は？」

「これもさっき考えたからありがちだけど」

平和の国マッシシロ王国だ」「マッシシロ王国」!？」

「作者も考えるの面倒なんだよ」

魔王の住む国なんて魔王の国マックロ王国だぞ?」「適当すぎないか!？」

「一々文句の多いやつだな」

とっつと決めてくれよ」

「……じゃあ勇者召喚の2年前」

ま、マッシシロ王国?と同じ大陸の何処かに14歳で送ってくれ」

「あいよー、じゃあ精々頑張ってくれー」

気の抜けた言葉のあと、おれのめのまえがまっくらになった

おいでませマツシロ王国

マツシロ王国マツシロ城広場

そこにミツイロ大陸を拠点とする沢山の冒険者が集まっていた
何といっても、今日この日に異世界から召喚された

勇者の仲間3人を決める審査が行われるからだ

何故大陸中の冒険者が集まったのかということ

冒険者としては勇者の仲間だったと言つのは泊が付き仕事の入り
が多くなる

要するにみんな金目当てだ（一部、本当に平和を願っている人もい
ると思うけど）

「俺もその一人なんだけどね」「ニヤーン」

俺の隣で体長約1mの子猫（絶句）が一声鳴く

最初は他の冒険者が絡んできたけど

こいつ呼び出した瞬間誰も声を掛けなくなったな

今までの2年間を全部説明するのはごめん被るが

取り敢えず影の能力をある程度使えるようになったし

魔物は10体位仲間に来た、現在コイツ以外は魔物牧場に預けて
ある

偶々6体目に仲間にした魔物がスキル『仲間を呼ぶ』を持っていた
ので

牧場からこっちに呼び出すのは一瞬でできる、戻すのは無理だけど

「おはよう冒険者の諸君!!」

上から声が聞こえる、白いヒゲに金色の冠をしているから多分王様
だろう

「これから勇者殿の仲間となる3人を決める審査を始める！」

最後の一人まで審査をしてから決めるので安心して一人づつ入ってきたまえ！」

最初の一人が入っていった、しかしアピールか…

一人辺り何分かかる計算なんだ？

3〜4時間後

喫茶店に行ったらほぼ全て冒険者がアピールし終わったらしく
ようやく俺の順番が回ってきた

「ほう、次はお主か

まだつら若き少女のようだが…腕に自身があるのか？」

「扉を開けると行き成りむさいおっさんに話しかけられたんだけど

こつこつ時どつこつ顔すればいいのか分からない」

「……笑ったら怒られると思つよ？」

机で王様と一緒に座っている、懐かしい学生服を着た青年が答えた
あれが勇者か、パツと見少し顔の良いモブAにしか見えんな

「じ…ゴホン！先ずは実力の審査だ！

どんな手段でも良い！俺を倒して見せ「ラリホー」「グーグー…スヤ
スヤ…」

「き、きたねえ…」「汚いは褒め言葉だ」

「宜しい、次はアピールタイムじゃ！

君の魅力を余すところなく勇者殿にみせなさい」

「魅力を余すところなく…だと？」

「闇魔法が使える」「中二心をくすぐるチヨイスだな」

「ニヤーン」「そうだった、序でに職業は召喚士だ」

「キラーパンサー？」「魔物化した子猫だ」「ニヤーン」

「闇魔法に魔物を従える魔法…そしてその金髪

ひょっとしてお主が七英雄の一人『黒のトリガー』か…？」

「クロノトリガー?」「黒は異名だ、そして人違いです」

「そ、そうか…アピールはもう終わったかの?」

「それでは最後に、お主が何故この審査に向いたのか教えてくれ」
「いい加減別の大陸で冒険したかったからです」

「勇者一行なら護衛する代わりに船で移動できますからね」

「普通は出来ないの?」

「護衛で船に乗れる人間は限られてるから」

私のように冒険者初めて半年の新米は信用されないんだ

勿論仲間になったからには魔王討伐に付き合うから安心しろ」

「あくまで冒険をする為か…宜しい」

「これで君の審査を終える、下がって良いぞ」

「では失礼します」

翌日、城下町の掲示板に勇者一行の名前が掲示されていた

勇者一行メンバー

- ・勇者 リヨウ・シノザキ
- ・女騎士 アスラ・ミッドガルズ
- ・女魔法戦士 ルーシェ・アフガレド
- ・女召喚士 ルイ・サイファー

一番最後のやつ…一体何シファーなんだ…まあ俺なんだけどさ
この世界では貴族でもない限り、性には生まれ育った故郷の名前が
入れられる

上の二人はミッドガルズとアフガレドで育ったんだろう

魔神剣とベギラマを使うんですね分かります

しかし勇者以外パーティー全員女つてのには作為を感じるな
まあ今まで一般人だった勇者に女とは言え

屈強な冒険者をどうこうできるとは思えんが

俺は再度城内へ赴く、謁見の間で勇者一行を集めるのだそうだ

「ん？お嬢ちゃんひょっとして迷子か？」

赤髪で長身の女が話しかけてきた、実際迷子みたいなもんだし聞いてみるか

「謁見の間という場所が何処か聞きたいのですが・・・」

「おお、それなら私と同じだね

あたしはアスラ・ミッドガルズ！通りすがりの迷子さ」

「あ、どうも俺はルイ・サイファーですって

あんたも人のこと言えないじゃないか!？」

迷子の騎士、アスラ・ミッドガルズが仲間に加わった

「いやー参ったね、この城広すぎっ」「やれやれだ・・・」

約30分くらい、現在マッシロ城の多分三階

謁見の間は一向に見当たらない

目の前には赤い宝箱が置いてある

「・・・この部屋もハズレか・・・さっさと行こう」

「おいおい、目の前に宝箱があるのに開けないのかい？」

「何言ってるんだ、城の中の宝箱なんて開けたら

牢屋行きに決まってるだろ？」

「開けてみるだけだって、それに勇者一行なんだから

そんなに価値のないものなら貰っても大丈夫さ」ガチャッ

ボタン!! 宝箱の中から昨日の鎧を着たおっさんが出てきた

「うがー！俺の眠りを妨げるものは死あるのみだ!!」

「そんな所で寝てるの!?!」

「あつ!!お前は昨日のちびっ子!

昨日はよくも卑怯な方法をとってくれたな!」

「卑怯な方法って?」「睡眠魔法で眠らせた」

「ああっ!その手があったか!!」「ラリホー」

ブウン!! 　しかしラリホーはおっさんには効かなかった!!

「ふははは!!今度は睡眠魔法は効かんぞ!」

「眠り耐性の籠った装飾品を付けてるのか」

「成程」ニア殺してでも奪い取る」だね!」

「勇者の仲間が追い剥ぎとは恥をs「マヌーサ」ぬわっふ!?視界が霞む
!!」

「占めた!!くらえ必殺・兜割り!!」

アスラは自分の兜をおっさんの顔面に叩きつけた

おっさんは状態異常『鼻血』になった!!

おっさんは鼻血を出している!!おっさんの体力が半分になった!!!

「止めだ!!オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア
!!!!!!」

ルイは影の拳でおっさんの顔面をしこたま殴った!!

おっさんに合計999のダメージ!!おっさんを倒した!!

経験値0を獲得、10Gを手に入れた!!

おっさんからフリスクを剥ぎ取った!!

レベルスターを獲得!!ルイ達のレベルが上がった!!

「おっさんは犠牲となったのだ・・・フリスク(ブラックミント味)の
犠牲にな・・・」

「所で読者の皆はレベルスターシステム知らないんじゃないか?」

レベルスターと言つのはこの世界において生物のレベルを上げる
経験値の結晶で

1レベル上がる度個人差はありますが強くなります

主に強力な力を持つものや存在感の強い敵なんかを倒すと現れる
不思議物質です

中にはレベルが一定以上無いと使えない技とかもあるからな

「さっきの兜割りみたいにネタとして一時的に使えることはあるけど
ね」

「ぐ．．．ぐ．．．良くぞ私を倒した．．．」

だが心して聞け!!私を倒しても第二第三の私が貴様らの前に立ち
はだかるぞ!!」

「えーっと．．．つまりどういう事だい？」

「つまりこれから先ずっとダンジョンや城で

落ちてる宝箱を調べると必ずこのおっさんとのバトルになるって
事だ」

「成程!!つまりレベルスターもらい放題なんだね!!」

「えっ、いや私にも仕事があるからそこまでは．．．」

「男が一度口にした事を濁すんじゃねえ!!(C/V若本)」

おっさんは二人の熱い一言に酷く感銘を受けた!!

「ちよっと辞表出してくる!!」ダダダダダ!!

「悪は去った!!」「まだ ライム一匹倒してないのに何て一言を．．．」
こうしておっさんを世界中の宝箱に封じ込める事に成功したルイ
一行は

再び謁見の間を探す事になった．．．．．

キルゼムオール

マツシロ城三階にて勇者と王様が待っているであろう謁見の間を
探す

ルイ・サイファーとアスラ・ミッドガルズの一行

二人は未だ謁見の間を見つけないことができないで居た

「お腹すいた」ぐー「我慢なさい」ぐー「……………」

「仕方ない・・・厨房に当たるまで『もやし』で食いつなごう」

「なんでそんな嵩張りそんな物を・・・」モシャモシャ ポロポロ

「文句言いながら食ってるじゃないか」モシャモシャ ポロポロ

「……………」そこまでよっ!!「……………」

「誰だ貴様らっ!!」

「右手にバケツ!!」「左手にモップ!!」「背中で語るはご奉仕道!!」

「この世に汚れがある限り!!」

「磨いて見せよう清掃の鬼!!」

「……………」家政婦戦隊!!メイドファイブ!!「……………」

「家政婦戦隊!?!」

「我らがご奉仕するマッシロ城を!!」「もやしで汚す愚か者!!」
「断じて許せん!!」「死ぬか!!」「消えるか!!」

「!!!」微塵に砕ける!!「!!!」

「メイドファイブ・・・聞いたことがある

マッシロ王国が遙か昔、それこそ魔物が誕生するもつと昔の話だ
マッシロ王国に攻め入った大国・・・その名もメイサイ帝国

オーバーテクノロジーとさえ言われた魔導兵器を操るかの帝国に
マッシロ王国は戦場となるまで追い込まれていた・・・」

「長いから結果だけ教えてくれない?」

「帝国軍がメイドファイブに全滅させられましたとき、めでたしめでたし」

「だと思っ たよ」

「あやつらか・・・懐かしい敵だ」

「ポップコーンさえ食べ歩かなければ生きて帰れたものを」

「映画上映でもしてたの?」

「過去の話はおしまいにしよう」「ここから先は未来の話だ」

「さあ!!愚か者共!!マッシロの土へ還るが良い!!」

メイドレッドが現れた!!

メイドブルーが現れた!!

メイドイエローが現れた!!

メイドピンクが現れた!!

メイドグリーンが現れた!!

「所で気になったんだけどメイサイ帝国が滅んだのって30年以上前
だよな?」

「!!!」生かして返さん!!!!!!「!!!」逆鱗に触れてどっする・・・」

「メイドスプラッシュ!!」

メイドブルーはバケツをルイたちに向けてほおり投げた!!
ザパアーン!!ルイたちは水属性のダメージを受けた!!

「ガードしますよっと」グニャン「うわっぷ!?!」

ルイは影を傘状にして水を防いだ!!アスラはモロに喰らってしまっ
た!!

アスラはバケツが頭に嵌ってしまった!!

「メイドカラミティ!!」

メイドグリーンははたきで旋風を起こした!!

ビュオオオオオオオ!!ルイたちは風属性のダメージを受けた

!!

「てりゃあ!!」「ぬわー!?!」「グッホオ!!や、やるじゃない!!」

ルイは影で旋風ごとメイドグリーンを殴り飛ばした!!

アスラはバケツで前が見えない!!よろめいてしまった!!

「メイドサンダーボルト!!」

メイドイエローはセーターをこすり合わせて雷を呼び寄せた!!

ピシャッ!!ゴロゴロゴロ!!!ルイたちは雷属性のダメージを受けた

!!

「ぬがっ!?!」「ビリビリビリ!!」「あb b b b b!!!」「バチバチバチ!!

ルイは怯んでしまった!!アスラは水を被っていて感電してしまっ
た!!

「メイドヒール!!」

メイドピンクはルイたちに回復魔法を放った!!

ルイたちは完全回復した!!アスラはバケツとよろめき、感電が治っ
た!!

「「「死ぬがよい!!」「「「あべしっ」
メイドブルー、グリーン、イエロー、レッドはピンクを制裁した!!
メイドピンクは倒れた!!

「数の暴力反対!!」「私たちもさっきおっさん相手にやったじゃないか・・・」

「は、腹減った・・・」ヨロヨロぐー・・・

「どうしたんだ?」「厨房・・・あと謁見の間は何処ですかあ・・・?」

「もやしで食いつなぐんだ!!」「モグモグ!!」ゴックン「ポロポロ

「プハアー、助かりましたお嬢さん!!

僕はルーシエ・アフガレドと言つものです

助かりついでに謁見の間の場所を「「「許さん!!」「「・・・え?」

「またこの城を汚すものが現れたか!!」

「丁度いい!!」「纏めて葬り去ってくれ!!」

「・・・ピンク?早くしてくれ

『「「「マッシュロの士へ』だぞ?」

「「「お、おいピンク!!」「「「びっぴしたんだ!!」

「し、死んでる・・・!?」

「び、ピンクウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
!!!!!!!」

「よ、よくもピンクをやいやがったな!!」

「不意打ちとは卑怯なり!!」「貴様それでも騎士の端くれか!？」

「お前らがさっき制裁したんだろっが!？」

「おのれ!!」「ピンクの弔い合戦だ!!」

「生きて!!」「帰れると!!」「」「」「」「」「」「」「」
「思うなよ!!」「」「」「」

「ぐっ・・・面倒なことになってきたな」

「シエーラって言ったけ？もやしの分働いてくれよ!!」

「もやしひとつ袋の恩で命のやり取りを強いられるとは・・・
ですが向「」に引く気は無いようですね!!」

リリカルトカレフキルゼムオール!!

魔法戦士リリカルシエーラ!! 始まります!!」

迷子の魔法戦士シエーラが仲間に加わった!!

ダンジョン付き一戸建てでこのお値段

「前回のあらすじ、リリカルマジカル」

「あなたは一体何を言ってるんですか?」「てめえ……」

「まあまあ、今は戦闘中でしょ?」「後で覚えてるよ……」

「さて!この中では僕が一番素早いみたいですね!!」

喰らいやがれえっ 邪ッッ!!」

シエーラはかかと落としを放った!!

メイドブルーに物理属性のダメージ!!

メイドブルーは気絶した!!

「行くよルイ!!」「集団戦闘の基本は!!」「各個撃破!!」

ルイとアスラは近くにあった鈍器でメイドブルーをタコ殴りにした!!

メイドブルーに物理属性のダメージ!!

メイドブルーを倒した!!

「ブルウウウウウウウウウ!!?」

「おのれ!!ピンクに続いてブルーまでも!!」

グリーン!!イエロー!!合体技でいくわよ!!」

「ガッテン承知!!」「喰らえ必殺奥義!!」

「ココメイドインフェルノ!!」

メイドレッド、グリーン、イエローは

はたき、セーター、ガスコンロを使って煉獄の炎を呼び出した!!

煉獄の炎がルイたちに迫る!!

「あれはまずうづつい!!具体的に言えばレベル40でも耐えられないかも!!」

「ルイさん!僕に残ったもやしを下さい!!」

さつきもやしを食べながら思いついた防御魔法で持ちこたえます!!」

「思いつき!」「ほらっ!もやしだよ!!」「モシャモシャ!!ゴックン!!」

「無駄だ!」「この魔法は過去に帝国軍を滅ぼした最強の奥義!!」

「たった一人の小娘に何ができるといふのか!!」「死ねえい!!!」

「リレミト」

シエーラたちはダンジョンを脱出した!!

ルイたちはレベルスターを手に入れた!!

ルイたちのレベルが上がった!!

「.....なあ?」

「私の師匠の残した言葉にこうあります」

『当たり前なればどうという事はない』

「.....よく考えたら戦うメリット何てないんだしいいか」

「何故かレベルも上がってるしね」

所でさつきもやしを食べる意味あったのかい?」

「あ、小腹が空いたのでちょっと貰いました」

「空気読めとは言わないからもう少し自重して欲しかった.....」

「それにしてもお腹空きましたねえ、丁度脱出出来た事だし
お昼ご飯でも食べへに行きませんか？」

「おっ良いねえ、付き合っつよ」「俺この辺りの事知らないからお任せし
て良いか？」

「っつして色々ありながらも絆を深めた三人であった

「……みんな遅いなあ」「……」

その頃勇者と王様は謁見の間で待ちぼうけていた

「いい感じに終わろうかと思っただけど驚きの短さだったから

もうちょっとだけ続くんじゃよ」「モグモグ

「計画性の無い作者……そう、アイツこそが私たちの最大の敵なんだ
よ!!」「モグモグ

「基本的に何も考えずに作ってますからねえ

作者は重度の貯金食いつぶし型の人間なんですよ」「モグモグ

「所でこれなんて食べ物なんだ？」

「これはマツシロ王国の名物『ぷっちゃん りん』ですよ」

「ぷっちゃん りんってモグモグ言わせて食べるものじゃないだろ……」

「コックン

「さてと、お昼ご飯も食べ終わっただしいい加減城へ戻ろうか」

「またあのメイド集団と戦うんですか？」

「ああ言っイベントに関係なさそうな敵は

もっ少しレベルを上げてから再戦する方がいいって

「勇者……って言えば分かるか？」

「あっ」「あっ」

その後、ルイ、アスラ、シェーラの方向音痴三人によるマツシロ城
攻略が始まった!!

「ルイさん危ない!!」「ドツブハア!」「ドゴシヤア!!

「危なかったね!危うくモンスターの魔法で睡眠状態にされる所だっ
たよ?」「

「この辺りモロパクリじゃないか!!?」

「いらっしやい、ここは厨房だよっ!!」

「あ、もやし余ってたら分けてくれませんか?

非常食って無いと落ち着かないんだよねえ」

「冒険者故の職業病ですね」「(もやしって非常食だっけ・・・?)」

「がおーっ!!ここから先はこの俺ミノタウロス様の住処だ!!」

「RPGっぽい魔物だ!!」「牛肉ですね!!」「レベルスターは落としそう
にないけどね」

ルイたちはミノタウロスを倒した!! 牛肉を手に入れた!!

「くっ・・・お腹が・・・」

「ごめんなさいルイ、アスラ・・・私はもうダメみたいです」

「小腹が空いたくらいで諦めるな!!」

「仕方ない、さっき貰ってたもやしまた頂戴しますね!」「モグモグ ポ
ロポロ

「あっ」「」見つけたぞ城を汚す不届きもの共め!!」「」

「仕事早いなアンタら!!」

「食事の邪魔を奴は馬に蹴られて死ね!!」

シエーラは思いついた魔法を唱えた!! 『ウマラギオン』!!!
空から屋根を突き破って無数の馬が降り注ぐ!!

「ひひーん!!!」

「ぬわーっ!?!」

メイドファイブは吹き飛ばされた!!

「……予想以上の威力に驚きを隠せない」

「(俺も魔物で出来るかなあ……)」

「見る!三つに分かれた迷路だ!!」

「定番だね、ここはバラバラに行ってみるかい?」

「いえ、ここはダンジョンどんな敵が出てくるか分かりません」

「ここは城だろ、まあそれは置いて俺たちが同じ場所に集合出来る気がしない」

全員で一つの道ずつ調べていくのがセオリーだな」

ルイは落ちていた宝箱を開いた ガチャッ

「ふはははは!!俺は仕事を辞めたぞおおおおおおお!!」

「な、何ですかこのおっさん!?

と言っかどつやってこんな小さい箱の中に……」

「最近ヨガにハマっていてな」「限度があるだろ!?!」

「ヨガフレーム!!」アスラは宝箱をおっさんに叩きつけた!!「ぎゃあっ
!?!」

おっさんの顔は宝箱に嵌ってしまった!!

「ヨガパンチ!!」シエーラはおっさんの腹を力いっぱい殴った!!

「ヨガヒップアタック!!」ルイはおっさんにヒップアタックを食らわせた!!

「ヨガキヤメルクラッチ!!」アスラはおっさんの首を絞めながら逆海老反りさせた!!

ゴキヤツ!!ベシィツ!!メキメキメキ!!

「ヨガアルゼンチンバックブリッカー!!」グギィツ!!

アスラはおっさんの背骨を叩きおった!!

ルイたちはおっさんを倒した!!

40Gを手に入れた!! おっさんから退職金を奪った!!

レベルスターを獲得!!ルイたちのレベルが上がった!!

「ただの強盗じゃねえか!?」「片棒担いでおいて何を……」

「行き止まりですね」

「困ったなあ、これが最後の道なんだけど」

「あっちなみにもう一つの道には『ただのしかばね』が落ちてあっただけだよ」

「城内にそんなもん転がってる時点で充分『じゃないですけどね』」

「ティーン!!わちき閃いた!!」

「いきなり一人称をわちきに変えてどうしたんですかルイさん?」

「道がないなら作ればいいじゃない」「……その発想はなかった!!」

「わし王様なんじゃけd」「黙れ」「ごめんなさい!!」

「あ、ああ……ああ……あ……」ほら勇者も突然の出来事に茫然自失してるじゃないか」

「ちっ、しゃあねえな

早く勇者連れて旅立つぞ」

「これ以上物語に勇者が関わらないのは色々と不味いですもんね!」

「じゃあ帰りは宜しくねシエーラ」「はい、リレミットー!」

ルイたちはダンジョンから脱出した!!

かくして、勇者と転生者、二人の仲間たちの冒険が始まったのであった

いざ、新大陸へ

「どうも、突如王国からパーティーに拉致られた

『異世界からの勇者』ことリヨウ・シノザキです

趣味はアマチュア無線、好きな言葉は温故知新です」

『七つの顔を持つ女』こと、ルイ・サイファーだ

趣味は冒険、好きな言葉は変幻自在だ」

『情熱と青春の象徴』ことアスラ・ミッドガルズだよ

趣味は料理、好きな言葉は一期一会だね」

『美食の奉仕者』ことシェーラ・アフガレドです

趣味は食事、好きな言葉は焼肉定食です」

「で、旅に出るのは良いが行き先は聞いているのか？」

「いや全然、王様にも魔王城どころか

魔界にどうやって行くのかさえ分かんないんだってさ」

「けっ使えないヒゲジジいだ」

「少しは老人を労りな、それなら世界中を旅しながら

魔界の伝承やら行き方の情報を探らなきゃいけないね」

「それなら俺の目的も果たせるしな」

「YAH O！知恵袋で聞いちゃダメなんですか？」

「色々と崩壊するからそれは最後の手段にしよう」

「さて、買い物も済んだことだしさっさと行こう」

「旅か・・・魔物と戦うって緊張するなあ・・・」

「あー・・・うん、ソウダナー」「戦えるといいですね」

「魔物は魔素しか食べる必要ないから

その片の魔素の籠った草を食べてりゃ生きていけるんだよ

「えーっと……つまり？」

「「こつちから向かわない限り魔物との戦闘はない」「

「一気に危機感が薄れてしまった」

「でも野党この大陸以外では野盗なんかも出没するらしいですし

ある程度の緊張感を持っておいた方が良いでしょう？」

「野盗かぁ……もう少し異世界っぽい敵が欲しいなあ」

「魔王が居るじゃないか」「ラスボスまで対人戦だけ!」

「むっ対人戦を甘く見るなよ？」

お前と比べればわかるが、この世界の人間は異常にタフネスで
年間に大陸中で多くても3人しか死者が出ないんだ

「まるでこつちが魔物じゃないか!」「今更気づいたんですか？」

「はいはい、メタな話だけでもうこれ5話目だよ？」

旅立ちまで何時までかけるつもりか

「そつだよっ！俺なんかかれこれ2話分も待ちぼうけくらつたんだよ
!？」

「むっ……じゃあこの話はおいおいするとしよっ」

「じゃあ、世界に夢と希望を与えるたびへレッツゴー!!」

「ルーラ

ルイとシェーラはルーラを唱えた!!

ザザーン ニャーニャー ザザーン

「こんにちは！ここは船着場だよっ！」
「ちよっと待って!？」
「どうした、忘れ物でもしたのか？」
「違う!!効率的には違わないけど!!」
「俺たち今フィールドに出ようとしてなかったっけ!？」
「ふっ馬鹿め！既にこの大陸は至る所まで冒険済み！」
「故に歩いて冒険する必要なんてない!!」
「レベル上げもレベルスターを落とす人って余りいませんからねえ」
「2週目くらいになったらゆっくり一人旅でもすれば良いさ」
「今回はあんた以外この大陸は知り尽くしてるから諦めな」
「冒険初めて一日でこれ程の理不尽を味わうハメになるとは・・・」

ザザーン ボー……

「まだ見ぬ世界へヨーソロー!」
「所でヨーソローってどう言う意味なんでしょうか？」
「私の見解では『ヨーソロー』『ユウ ソロ』『ソロは音楽用語で『独奏』、つまり『HEYボッチ』って意味じゃないかと」

「そんな意味であつてたまるか!!」

「……………」

「新大陸への冒険……ルイさんは召喚士……この海……荒れるぞ……

!!

「何を根拠にそんな事を」

「そう言えば掲示板で見ましたけどルイさんって拳闘士じゃなくて召喚士なんですね」

「お前だって武道家じゃなくて魔法少女だろうが」

「一応召喚魔法も使えるけど闇魔法が便利すぎるのが悪い」

「闇魔法・・・ああ、あの『スタンド』みたいな奴ですか」

「確かにオラオラとか言ったけど敢えて言おう『それ違う』」

「で、勇者はどうしてルイが召喚士だと海が荒れると思うんだい？」

「えふえふ を知らないなんて嘆かわしい!!」

海に出て新天地へ向かう瞬間！突然の幼女の離脱は定番でしょう

!!

おのれリヴァイアサン!! 貴様だけは絶対に許さん!!」

「序でに補足すると烈海王とチキン、ローザ姫も離脱するな」

「リヴァイアサン、確か海の王様ですね」

そんなとんでもない魔物が現れるわけじゃないじゃないですか」

ザッパーン!! 「幼女の召喚士と聞いてすっ飛んできました!!」

「このロリコンどもめ!!」

「俺16歳んだけど・・・」「合法ロリって奴ですね」「ぶっ飛ばすぞ

てめー!!」

「はいはい、多分負けイベントだろうけど張り切って行くこうねー」

「初戦闘が負けイベントとかヤダこの世界」

「あー、かったりーまあ幻獣界もそれはそれで面白そうだし良いか」

「私泳げないんですけどね・・・」

「えっ何でそんなにやる気ないの？」

「」「」「つるせえさっさと始めねえと三枚におろすぞ!!」「」「」「ごめんなさ
いっ!!」

シエーラの攻撃!! 「今のうちに装備を外しておきますか」「ゴソゴソ
シエーラは溺れないように装備を外した

アスラの攻撃!! 「はいはい、攻撃攻撃」ペチン
リヴァイアサンに物理属性ダメージ!! リヴァイアサンはダメージを受けなかった!!

ルイの攻撃!! 「幻獣界ってどんな所なんだろうなあ〜」
ルイは妄想に耽っている!!

リヨウの攻撃!! 「びつくりするほどやる気ゼロ!!!」
リヨウはツツコミを入れた!! しかし効果はなかった!!

「うおりゃあーくらえ!! すっごい津波!!」
リヴァイアサンはすっごい津波を起こした!!
全員に1000のダメージ!! 全滅した!!

「うぁー!!」 「津波だー!! 全員何かに掴まれ!!」

「よしみんな、また会おう」ピョン!! ルイは海に飛び込んだ!!

「やれやれ、じゃっ縁が有ればまた会えるさー」ピョン!! アスラは海に飛び込んだ!!

「次に会う時までには洗脳されておきますね!」ピョン!! シエーラは海に飛び込んだ!!

「言った本人が言うのもなんだけど、みんな順応早すぎじゃないか?

はぁ・・・次の仲間はガキ二人かぁ・・・」ザッパアーン!! リヨウは流されていった!!

かくして、勇者一行は旅立って1時間も立たない間に壊滅を喫したのだった

流されてダイダイ村

「前回のあらすじ、リヴァイアサンに襲われて俺たち一行は全滅

その後、船は津波で流されてみんな別行動になりました」ザパア

「前回のあらすじ、新大陸へ旅だった私たちは航海中

リヴァイアサンなる魔物に襲われ全滅、その後離れ離れとなった

パーティー編成直後に離散、これを不幸と言わずに何と言っかね

?」ザパア

「前回までのあらすじ、僕たち勇者一行は航海中に津波で離れ離れになりました

さあ、僕の活躍はこれからだ！早く敵の国へ行って洗脳されてこないと」ザパア

「前回までのあらすじ、ロリコンに流された

無駄に満天の星空なのがムカつく」ザパア

「「「「「.....」」」」」 ザザーン ニヤーニヤー

「(何でみんな居るんだ!?)」

「(まあ普通に考えれば全員同じ方向に流されたんだからこうなるよね.....)」

「(所でルイさん、幻獣界へ攫われたんじゃないかなかったですか?)」

「(入国審査の所で

『えー、16さーい!きもーい!!幻獣界に入れるのは小学生までだ

よねー!!』

って言われた)」

「(当たり前のように心の中で会話しないでください二人共)」

「はあ、ともかく壊滅だけは避けれたんだ

見た所(ここも別の大陸であることに変わりはない)なさそうだし

私たちの最初の冒険の地はここで良いじゃないか」

「ルーラで帰れますけどね!!」「それ以上いけない」

「丁度あっちの方に明かりが見える、行ってみよう」

「いらっしやい!ここはダイダイの村だよ!」

「代々野村?変わった人たちですね」

「『だいたい』の漢字は『ちえん』と一緒にだよ」

「あの読み方が基本だと思っていた作者は大恥をかきましたけどね
!」

「何故自ら黒歴史をバラす・・・ダイダイの村か

世界地図を信じる限り此処はヨツイロ大陸のマツチャ公国だな」

「ヨツイロ大陸か・・・随分遠くに来たわけでもないね」

「思ったより近くと言わないあたり

遠くに来た方が物語的な盛り上がりがあると思ってるんだ」

「そんな事よりお腹がすきました、晩御飯にしましょう」

「そうだな、リヨウ王様から軍資金みたいなもの貰ってないか?」

「50Gとひのきのぼうしか貰ってないぜ」

「ルーラ」「ルイとシェーラはルーラを唱えた!!」

「むっ!何ソ「マヌーサ(物理)」ギャアアアア!! 目が!!目がああ

ああ!!」

「はいはい、ちょっと通りますよ」「シェーラはパイプ椅子を取り出して
殴った!!」

「うらわばっ」「ドグシヤア

「な、なんじゃ貴様ら!!勇者殿と旅に出たんじゃ無かったのか!?!」

「うるせえー!!世界を救う俺たちへの軍資金が50Gってどういう了見だてめーっ!!」
「そうですねよ!!50Gなんてせいぜいつまり某が5本しか買えないじゃないですか!!」
「仕方ないじゃろっ!!この城の維持費だけで我が国はすっからかんなんじゃ!!」
「ならば貴様の命で払ってもらおう!!殺るぞシェーラ!!」
「食べ物への恨みは恐ろしいんですよ!!」

メメタア

「100000G拾ってきた」
「嘘だっ!!」「ど、どっしたんですか勇者さん!?急に『声優』まで替えて……」
「ごめん、少しネタに疾オーバードライブ走しただけだよ」
「それよりも10万Gって……よくあのいかにもケチそうな王様がくれたね……」
「貰ったんじゃない、拾ってきたんだ」「正確には金庫の中に落ちていました」
「……ま、言いや早くご飯食べに行こっよ」「勇者も大分順応してきたね……」

「マスター、オススメを一つくれ」
「あっ私はこの大盛りカレーをお願いします」
「私はチャーシュー麺とバーボンを一つ」
「俺は生姜焼き定食でお願い」
「ウイ、ムッシュ」

「全く統一感の無い店だな」

『おにぎり』しか出ないよりかなりマシじゃないですか」

「寧ろそれは定食屋と言えるのだろうか？」

「作者は昔おにぎり専門店なるものを見た事があるそうだよ？」

文字通り『見ただけ』だけど」

「チャーシュー麺とバーボンです」「随分早いね」

「生姜焼き定食です」「次は俺か」

「大盛りカレーライスです」「わーい」バクン！「一口!!」「」

「本日のオススメです」「・・・寿司?」「ネタはイカみたいだね」

「イグザクトリイ、そのとおりでございます本日のオススメは『いかのおすし』です」

「流石に一貫じや腹が膨れないな」

「当店では寿司を『ひと皿』でなく『一船』で出す決まりとなっております
ます

「これはホンの繋ぎですよ」

「イカオンリーの舟盛り・・・シユールな光景だな」

「さあ、外で船長がお待ちです」「船に積んだのか!？」

「わーい」バクン！「一口で4分の1減った・・・だと?」

「清々しい朝だねえ・・・」

「もうイカは見たくない・・・」

「ぐへへ・・・僕の胃袋は108式まであるぞ」

「一人部屋で孤独な一夜を過ごしました」

「お前は俺ら三人と一緒に寝るつもりだったのか?」「そんな事実は一切無根です」

「で、RPG的には村長を訪ねて見るものだけに行く？」

「流石にこんな中でもその位のテンプレは残ってるだろうし行くか」

「既に嫌な予感が……」

「おお、ではあなたがマッシロ王のブログに載っていた勇者様一行なのですね？」

「(ブログ……?) はい、それで合ってます」

「魔界への行き方の情報やら伝承があれば聞きたいんだが、お願いできるかいい？」

「ふむ、そういう事ならここから東へ向かった所に

賢者を夢見るものが訪れるという知識の洞窟があります」

「賢者ですか、私の目標でもありませんね？」「えっバトルマスターの間違いでしょ？」

「余計なことを言う勇者さんはメメタアしますよ？」「ごめんなさい」

「はいはい、口を挟まない」

話の流れからするにその洞窟へ行けば何か手がかりがあるんだね」

「はい、洞窟を封印している鍵は私が持っております」

「なら少しの間貸してくれないか？」

「いえいえ、勇者様一行と言えどこの鍵は世界に一つの貴重なもの

おいそれと渡すわけには行きませぬ」

「むっそれもそうだな、なら出来る範囲で頼み事w」欲しければワシから奪ってみるが良いッ!!」

村長が現れた!!

「「「ジジイ無茶すんな!!」「」」
「ふおっふおっふおっ、知らないのですか？」
RPGで序盤に出てくる老人キャラは大概強いものですぞ!!」
「そうか、なら全身全霊で『殺し』にかかろう!!」
「剥ぎ取りなら任せてください!!」「またこの剣を血で染める事になる
とはね・・・」
「みんな思考が極端すぎるぜっ!!!!」

数時間後

「チーン 勇者リヨウのしかばね
「ぐふうっ!?!・・・少しは老人を労らんか!!?」
「チーン」「チーン アスラならびシエーラのしかばね
「仲間を瞬殺、俺にチート能力を全開で使わせるような奴に手加減で
きるか!!」

!!
ルイは影を巨大化して村長を殴った!!村長に物理属性のダメージ
!!
「「っはあ!!これ程の強敵・・・あのメイド以来30年ぶりじゃのう・・・
!!破アッ!!!!」

村長は両手から光線を放った!!
ルイに物理属性のダメージ!!
「っおおおおおおお!!!!」ガガガガガ!!!!
ルイは影を盾にして光線を防いだ!!

クイズ 知識の洞窟

前回のあらすじ VS 村長

「村長を倒した俺らは洞窟の鍵を奪い取り

知識の洞窟なる場所へたどり着いた」

「ちなみに道中には何も無かったからカットしたよ」

「途中盗賊なんかも出ましたけど、一方的にボコボコにしてはぎ取り
ました」

「世界を救う勇者一行としてはぎ取りはどうかと思うんだけど・・・」

「良かったじゃないか、『山賊の斧』を装備して

お前も晴れてひのきのぼう卒業だ」

「盗賊が持っていたのに『山賊の斧』とはこれいかに」

「盗賊が山賊から奪ったんじゃないですか？」

『ここは知識の洞窟、知恵と発想を試す場所』

「知恵と発想・・・？」

「つまりクイズや謎解きがあるって事だね」

「となれば魔法少女で理系な私の出番ですね!!」

「(体育会系の間違いだろ)」「メメタア」「テレパシー!？」

「別に一人でとく必要なか無いんだから協力すれば良いだろ」

「むっ、それは違いますよルイさん!!」

RPGの主人公は仲間を何人連れていようと謎解きの時だけは孤
独なんです!!」

「そんなの効率悪すぎるだろ」

「RPGに効率を求めるなんて・・・!!あなたはそれでも人間ですかッ

!!?

「効率を求めるだけで非人間扱いされるRPGって一体……」

「シエーラ、お前はもう少し大人になるんだ……」

「考えてみる、この小説でこれまでにRPGらしい展開あったか？」

「それはそうですが!!」認めるんだ!」「こんな横暴を認めてしまったら世界数多に点在する孤独な主人公たちがバカみたいじゃないですか!!」

「ああバカ野郎さ、だが!!俺たちはその偉大な馬鹿野郎たちの失敗のお陰で

成長出来るっ!!仲間たちと協力して謎を解いて何が悪いっ!!」

「っ!!あなたとはここで決着を付けなければいけないようですね……」

「仲間と協力することに反対されるRPG」

「謎を解くときはね、誰にも邪魔されず

なんというか救われてなきゃあダメなんだ 独人で静かで豊かで……」

「ツツツ!!まとめ役のアスラさんがボケ始めたら誰が収集付けるんですか!!?」

「お前らが討論を続けければ続けるほど、私の影が薄くなっていくんださっさと両方謝ってイベントすすめる、さもなければ私はまとめ役を辞めるぞ」

「そう……ですね、すみませんルイさん

私の勝手な理屈で一人で解くことを強要してしまっ……」

「別に構わんさ、さあそろそろ『何時まで続くんだこの茶番』って怒られるからイベントを進めよう」

知識の洞窟 その1

「うわっ何だこゝ? 道が岩で塞がれてるじゃねえか」

「入ってそうそう詰むなんてありえません

あの看板にヒントが書いてあると思います」

『邪魔な岩をどかして道を作れ』

「ポ モンだコレー!!?」

「知恵と・・・発想・・・?」「腕力の間違いだろ」「肩が凝りそうだね」

「はっ!! 違いますよみなさん!!」

「この看板には『どかして』と書いてあります『転がして』じゃありません!!」

「成程・・・つまり使える秘伝マシンは『かいりき』

じゃなくて『いわくだき』なのか!!」

「その発想はおかしい!!」

大体あんなでっかい岩をどうやって砕くんですか?」

「ああ、勇者は知らなかったね、私たちが謁見の間にとり着いた方法」

「チェーンジゲッター!!ゲッタードリル!!」

ルイは影をドリル状にして右腕に巻いた!! ギャルギャルギャルッ!!

「キヤーイクサーン!!」「さあ!!景気よくブチ抜いておしまい!!」

「俺を!!俺たちを誰だと思ってやがるうううううううう!!!!!!」

ドガァン!!

ルイはドリルで壁をぶち抜いた!!ドリルの回転でルイは前へ飛んでいった!!

ドガガガガガガガガッ!!!!!!

壁Aは倒れた!!壁Bは倒れた!!壁Cは倒れた!!壁Dは倒れた!!

OGを手に入れた!! 残骸を手に入れた!!

「目が回る……」フラフラ

「ルイさんの貴重なクール顔崩壊シーン」

「カメラを持ってこなかったのが悔やまれますっ!!」

「今更だけど『いわくどき』と言っつより『ドリルライナー』じゃないかい?」

「俺エメラルドで止まってるから分かんね」

知識の洞窟 その2

「ん? さっきとは打って変わってこじんまりした部屋だな……」

「あそこに看板と箱がありますね」

『1～9の異なる数字が1枚につき1つずつ書かれた9枚のカードがある。』

この中からA～Cの3人が何枚かずつ取り、そのカードに書かれた数字の和について

次のA～ウの事がわかっているとき、A～Cの3人が取らずに残った1枚のカードに

書かれた数字として正しいのは何か。

ア Aは3枚取った。

イ Bは3枚取り、その3数の和はAの3数の和の3倍より2大きかった。

ウ Cは2枚取り、その2数の和はAの3の倍数の和の2倍より3大きかった。

* 答えは其処のフリップに書いて下さい、一人につき一回だけで
す

「せーのっ」

「『「『こんな真面目な問題求めてねーんだよ
!!!!!!!
『「『

「はあはあ……じゃあ冷静になって考えるぞ」「
「うーん……騎士の私には難しすぎる問題だね」「
「もういつそこの扉もぶっ壊しませんか?」「
「作者もコピペ使わずに頑張っただから考えようよ」「
「うーん……チラッ ああ成程、答えは4だな」「
「今カンペ見ただろ!!」「そんな事実はありません」「
「じゃあどう言う理屈で4なのか言ってみなよ」「

「A〜Cの3人のカードに書かれた数字の合計をそれぞれa〜cとし
て

条件イ、ウより

$$b = 3a + 2$$

$$c = 2a + 3$$

残った1枚のカードの数字をxとすると9枚全部の合計より(以下

中略

よってa 7の時 を満たすxは存在しないから

残った1枚に書かれた数字は『4』だ」

「あの一瞬で全部暗記しただっ!?」「そんなに信用ないか?」「
「ちなみに全部書かなかったのは文字数が半端ない事になるからで
す」

「『こんなコピペでも出来るから文字数稼ぎだと思われたくないんだ
とね」

『ピンポン』

「あれ?まだフリップに書いてないよ?」

「監視カメラでも仕込んであるのか？」

「そう言えばフリップに魔法の痕跡はありませんし」

「これに書かれたものを見るには直接見るしか無いんですよね」

「・・・何処からともなく洞窟へ入った俺たちを監視する謎の人物・・・

今度こそファンタジーの予感!!!!」

「エクスクラメーションマーク5つも付けるほど感極まるなんて・・・

余程飢えてるんですね!!」

「誤解される言い方しないで下さい」

「勇者が飢えてるのはともかく扉が開いたんだ

監視している奴の顔を拝むためにも早く進むよ?」

「あ、長くなるんで次回に続きます」

「(しまらないな・・・)」

勇者一行の前に立ちはだかる数々の難関

彼らは力を合わせ、謎を解くことができるのか?

つづきます

クイズ 知識の洞窟？

「前回までの」「あらすじ」

「ドリルは男のロマンですねっ」「えっ俺のセリフは……？」

知識の洞窟 その3

ヒュオオオオオオオオ……

「びっくりするほど氷点下」

「あの空調から冷気が出てるみたいだね」

「ここくらいはファンタジー要素を入れて欲しかった」

「空調を床一面氷張りになるまで入れてる時点で

「これの製作者の頭が状態異常『ファンタジー』ですよ」

「看板……見なくても大体わかるけど一応見ておくか」

『この迷路の床は大変滑りやすく出来ている

所々に置いてある岩を駆使してゴールまで辿り着け』

「その よろしく所々に岩が配置されてるね」

「浮遊魔法とかで行けないものなのかい？」

「どれどれ」

ルイは自分の影に飛び乗った、しかし影は直ぐに戻ってしまった

「(影が戻った……?) (どうやらダメらしい

今回は大人しく滑っていいっつ」

ガンッ!! ガンッ!! ゴンッ!! ゴシヤァッ!!

「なにこれ超痛い」「止まるたびに壁やら岩に激突するからHPがガリガリ削られていくよ」

「そうだ、いい事考えた」「私事です、ルイさんからどうぞ」

「アスラが盾を構えた状態で先頭に並び変えれば被害を最小限に抑えられる筈だ」

「成程、名案だね」「シエーラさんは？」

「私は床じゃなくて上から垂れてる氷柱を掴んでぶら下がったほうが早いと思いました」

「どうして召喚士と魔法少女で此処まで思考が違うんだろう・・・？」

「召喚士・・・？そうだ、騎士の私からも一つ案があるんだけど」

一旦氷部屋の外に出て知識の洞窟その2

「出てよ俊敏なる店主・・・」『ガーゴイル』!!

ルイの前に魔法陣が現れ、その中からトル コと少年ヤン スのトラウマが姿を現した

「いらっしゃいルイさん!!今日も良いものありますよ!!」パタパタ

「飛べる魔物とは言ったけどまさか『店主』を仲間に使っていたとはねえ・・・」

「昔持っていたアイテムが『ワープの罫』で飛ばされた時にひと悶着あつてな

無茶苦茶言つもんで店番全員ボコボコにしたら仲間になった」

「そんな・・・ある意味どのダンジョンのボスよりも恐ろしいと言われた

店主軍団を返り討ちにするなんて・・・私とルイさんの実力はそこまで離れて居たんですね・・・」

「あれ以来我ら店主族はルイさんに頭が上がらないんですよ

あつても勿論泥棒したら襲いかかりますよ？」

「金に困ってるわけでもないし、正当な買い物なら金を払うさ

で、今回呼び出したのは何時もの宅配じゃないんだ」

「はあ、戦闘は勘弁してくださいね？」

「私たちはあくまで傭兵ではなく店主ですから」

「レベル99の人間を容易く屠る方々が何ほざいてるんですか？」

「はい黙っててシェーラさん、この先の迷路で貴方たちの力を借りたいんです」

「！！！！！！」おっきゃくさまのっ！！ためならっ！！えんやこらっっ

！！！！！！ バッサバッサ

「傍から見ると相当シユールな光景ですね」

「傍から見なくても店主二匹に捕まって空を飛んでる光景はシユール以外の何者でもないと思う」

「召喚獣が呼び出してすぐ消えなくて助かったよ」

「そうだな（だってこれ『仲間を呼ぶ』だし）」

知識の洞窟 その3 クリア

「ぜえぜえ・・・じゃあ我々はここで休んでいるのでお帰りの際は声をかけて下さいね」

「リレミトは使わないのかい？」

「あー、えっと誠に言いつらいのですがアレ戦闘中以外は使えないんですよ」

「寧ろ戦闘中に使うことのほうが稀なのに・・・」一回戦闘中に使えたお陰で助かったから文句は言えん」

知識の洞窟 その4

『問題、次の問に答えよ』「答えは 3だ」ピンポン ガチャッ

「ええ・・・」真面目な問題なんて誰も望んでません」

知識の洞窟 その5

「扉が3つに分かれてるな」

「この内どれか一つが正解とかそんな感じでしょうか？」

「間違えたら真つ逆さまとか？」

「間違えなきゃいい話だよ、なにになに？」

『 掲示板

ダンジョンで3つの扉を選ぶとき

1名無しさん

一番右の扉が次のルートへ行ける

2名無しさん

嘘乙、マジレスするところいう時は真ん中が一番安全

3店主

クラピカ理論は正しかった、左に行くところ

4名無しさん

お前らバカ杉ワロタwwwこんなの全部の扉開けて試せばいい

じゃんwww

5名無しさん

お前だけは許さない絶対にだ

この掲示板をヒントに扉を選べ』

「読解パズルって奴か、こつこついう場合は『ここから先は嘘つきしかいない』とか

『一人だけ嘘つきがいる』とか『一人だけ本当の事を言っている』ってパターンなんだが」

「そついった事は書いてませんね、しかも全員の意見を参考にすると矛盾が生じます」

「私も 4と同じこと考えたけど 5を見る限り駄目だったみたいだね」

「一人だけ店主がいることに誰も突っ込まない不思議

と言っか見た感じ2ちゃんねるなんだから

全部が全部信用できる訳じゃなくない？」

「確かに、2ちゃんねるで得た情報って名無しが多いから好き放題書

き込めるんだよな」

「じゃあ唯一「コテハンのある店主のコメントが一番合ってる確率高いね」

「と言っかさつき店主に運んでもらったんだから聞けばいいじゃないですか」

「えっ、ああ確かに昔来たことがあります

そっついや書き込んだなあ〜あの扉、実は全部正解なんですよ」パタ
パタ

「掲示板の意味は一体なんだったのか」「恐らく入ってきた人間を怖がらせる為、だろっつね」

「岩を押ししたり滑る床をぶつかりながら滑ったり、拳げ句の果てには考えすぎが命取りな罠・・・

一二つ目以外完全に強靱な肉体と勇気を試す洞窟だな

本当に此処って知恵と発想を試す洞窟なのか？」「私も自信なくなってきました」

知識の洞窟？ その5

「看板以外何もないな」「ぼちぼち開発経費が無くなってきたんでしょっつか？」

「どれどれ、あれ？セロテープで下にメモが貼ってある・・・」

『この魔物を打ち倒せ』

『歯の治療に行ってください b y エ ス ーク

p s 俺様がいない間、此処の鍵は開けつ

放しにしてあります』

「・・・ボスは綺麗な歯が命だからねえ」

「せっかくのファンタジーが・・・」

「エスークとかレベル4〜5の私たちに無茶言わないで下さい」

「寧ろ歯の治療が無かったらそれこそダイダイ村の村長の出番だったな」

「あの人そんな強いのか!!？」

知識の洞窟？ その6

『これが最後の問題です』

「この問題を解いた時、あなたは賢者となる資格を得ます」

やっ、いれ何問題っ？』

「・・・・・・6だな」『ピンポーン』

「何でしょう最後の最後でこのガツカリ感」

「こんなので賢者になったらマツハでダーマ神殿に駆け込む自信ある」

「そもそも俺勇者だから転職出来ないんだけど」

ピカーーーー・・・!! 突如看板が輝きだした!!

「うわっ!? なんだこれっ!!」

おれの
めのまえが
まっしろになつた

続きます